

第三章 秋好中宮の物語 出家と母の罪を思う

[第一段 秋好中宮、出家を思う]

六条院は(ろくでうのゐんは、源氏殿は)、*中宮の御方に渡りたまひて(冷泉院御所の中宮の御部屋にお寄りなさつて)、御物語など聞こえたまふ(お話し合いをなさいます)。 *「ちゅうぐうのおんかたに」は<冷泉院御所の秋好中宮方に。>と注にある。

「今はかう静かなる御住まひに(今はこのように落ち着いていらっしゃる御住まいに)、*しばしばも参りぬべく(始終伺わなければならぬような)、何とはなけれど(お話し向きは無いけれど)、過ぐる齢に添へて(年を取るほど)、忘れぬ昔の御物語など、承り聞こえまほしう思ひたまふるに(忘れられない昔の事をお聞きしお話ししたく存じられますが)、*何にもつかぬ身のありさまにて(此方の御所では私は何とも落ち着かない立場だし)、さすがにうひうひしく(やはり恐れ多さもあり)、所狭くもはべりてなむ(つい遠慮がちになります)。 *「しばしばも参りぬべく何とはなけれど」は、渋谷訳文に<しばしば伺うことができ、特にどうということはないけれども>、与謝野訳文に<始終お伺いして、何ということもありませんが>、とある。不正確だ。「参りぬべく」の「ぬ」は、「参る」の事象完了表意ではなく、妥当性の助動詞「べし」の強調意の助動詞で、源氏殿は「しばしばも」参上して<いた>のではなく、「しばしばも」参上せ<ねばならぬ>事情に強制感をもたせる「参る」の假定完了形で、「しばしばも参りぬべく」は<頻繁に伺っていないならばならなかったような→何度も参るべきほどの>と読むべきだ。で、「何とはなけれど」が<それほど火急の話は、何も無いが>という言い方。 *「何にもつかぬ身のありさまにて」は注に<『集成』は「どっちつかずの身の有様で。ただの臣下でもなく、真の上皇でもない、准太上天皇の身分をいう。源氏の卑下の言葉」。『完訳』は「中途半端な身分と卑下。准太上天皇は上皇でも臣下でもない」と注す。>とある。確かに此処までの文脈からして、殿の臣下意識の強調は感じられる。殿の身の処し方が難しい事情も読者には良く分かる。実の子という事実を除いても、公的にも義理の子であり、同時に主君だという複雑さ。ただ、それは冷泉院および冷泉院御所に対する敬意で、養女の梅壺中宮その人に対する遠慮ではない気がして、此処以下の文意は私には非常な難文だが、いやだから、此処の発言は場所柄が敬遠された、と取る他は無気とする。また、「うひうひし(物慣れない、気が引ける)」は「初々し」と漢字表記されるが、この語自体は漢語ではなく和語だとすれば、「恭し」と表記される「うやうやし(大事に思う、恐れ多い)」と同源語と見做せそうだ。「所狭し」は<気詰まりだ→遠慮がちだ>。

我より後の人びとに(私より若い人たちに)、方々につけて後れゆく心地しはべるも(それぞれの事情で出家を先に越されている気がするのも)、いと常なき世の心細さの(実に無常の世の心細さが)、のどめがたうおぼえはべれば(差し迫っているように感じられますので)、世離れたる住まひにもやと(世離れた出家生活に入ろうかと)、やうやう思ひ立ちぬるを(遂に決心しましたが)、残りの人びとのものはかなからむ(残された者たちが気落ちして)、漂はしたまふな(路頭に迷わせなさないように)、と先々も聞こえつけし心違へず(と前々から申し付けた通りに)、思しとどめてものせさせたまへ(お考え頂いてお世話して下さい)」

など(などと殿は)、まめやかなるさまに聞こえさせたまふ(神妙にお願い申しなさいます)。

例の(中宮はいつものように)、*いと若うおほどかなる御けはひにて(とても若々しいおっとりした御物腰で)、 *「いと若う」とあるが、中宮の年齢は冷泉院の9歳上ということから41歳と見ておく。しか

し、若菜下巻に於いて紫の上の年齢が従来の源氏殿の8歳下から10歳下に変更されたので、以前は中宮が紫の上より1歳年下だったものが、此处では1歳年上ということになってしまう。紫の上に合わせて39歳だが、それでも源氏殿の50歳と比べて、然程は若くもない。いや、雲上人の二人は現代人のように若かったのかもしれない。ということは、現代人はほとんど当時の雲上人級の暮らしぶりか。いや、雲上人であること自体の生活感こそが決定的な違いか。身分格差をなくしながら身分社会が育んだ伝統文化を継承する困難さは、この国だけではなく人類共通の永遠の命題だ。各国や時々事情に応じて、社会構造に身分差が無いという非現実さに対しては、身分資格の正当性と資格基準の客観性を設け、伝統文化については様式の正確な記録と継承は保持しつつ、執行行事としては創造的工夫を加え続ける努力を尊重する運営を図る、としても、身分保障と伝統継承は相関するので絶対定型は永遠に無い。そも、豊かさ自体が事物に対する各個の競い合いの結実であってみれば、穏やかな暮らしは其の恩恵に浴している状態に過ぎない。且つ、ヒトの充実感は全てでは無いが、特に情熱は競争心に注がれる。但し、此处で言う「競争」は目先の優劣だけではなく、目の付け所や人生観などの総合的な広義の向上心。なお、殺し合いは競争相手を失う論理破綻で組織運営上は排除制御されるが、豊かさを示す物質に限りがある以上、個人の現場に於いては物質確保の必要性から自動成立する。戦争は気持で止めさせるのではなく、戦闘必要状況が解除されたと認識しないと止まらない。いや是はだいぶ話が逸れたが、雲上世界が社会的存在である以上、事の本質は近いと思う。

「九重の隔て深うはべりし年ごろよりも(九重の門の奥の宮中に居りました何年間かよりも)、おぼつかなさのまさるやうに思ひたまへらるるありさまを(お目に掛かれないことが多くなったように存じられます今の形が)、いと思ひの外に(本当に思いの他に)、むつかしうて(困ってしまして)、*皆人の背きゆく世を(皆が出家してゆくこの世を)、厭はしう思ひなることもはべりながら(煩わしい思いになることもあるのですが)、その心の内を聞こえさせうけたまはらねば(この胸の内をお聞き頂きご意見を伺うということが出来ず)、何事もまづ*頼もしき蔭には聞こえさせならひて(何事も先ず頼みとする六条院殿にご相談申し上げる習いなので)、*いぶせくはべる(決められないからなのです)」 *「皆人の背きゆく世を」は注に<「皆人の背き果てにし世の中にふるの社の身をいかにせむ」(斎宮女御集)>と引歌指摘がある。中宮の言う「皆」は紫の上と女三の宮のこと、かと思う。また、此の文以下は「むつかしうて」の内容説明となる構文。 *「頼もしき蔭」は<頼りになる後ろ盾=源氏殿>。 *「いぶせし」は<もやもやとして気が晴れない→はっきりしない→決まらない>。「いぶせくはべる」は注に<連体形止め。余意・余情効果。>とある。が、是は、「むつかしうて」の説明構文の結びとして理由明示の文意となっているので、重複を厭わず敢えて下に補えば<「いぶせくはべる」をむつかしう思ひたまふ>くらいになるのだろう。

と聞こえたまふ(と申しなさいます)。

「げに(確かに)、公さまにては(宮中で帝の後という公務にあられては)、限りある折節の御里居も(折節ごとに決まったお里帰りのお暇も)、いとよう待ちつけきこえさせしを(とても心待ち申し上げておりましたが)、今は何事につけてかは(今は左様な定期休暇も無いので、どういう時と言って)、御心にまかせさせたまふ御移ろひもはべらむ(気ままなお里帰りがお出来になることもないでしょう)。

定めなき世と言ひながらも(無常の世と言っても)、さして厭はしきことなき人の(特に困難な事情に無い人が)、さはやかに背き離るるもありがたう(そう急いで出家するのもあまり例が無く)、心やすかるべきほどにつけてだに(気楽に身を処せる低い身分の者でさえ)、おのづから思ひかかづらふほだしのみはべるを(どうしても後の事が心配になる家族だけはありますものを)、

などか(どうしても貴方様のような頼られる立場の御方の)、その人まねにきほふ御道心は(そのように我が妻たちの後を競うようような御仏道心は)、かへりてひがひがしう推し量りきこえさする人もこそはべれ(却って偏屈に邪推申す者が出てまいります)。かけてもいとあるまじき御ことになむ(絶対にあってはならない御事なのです)」

と聞こえたまふを(と殿が申しなさるのを)、「深うも汲みはかりたまはぬなめりかし(殿は私の気持ちを深くはご理解なさっていらっしゃらないようだ)」と(と中宮は)、つらう思ひきこえたまふ(辛く思い申しなさいます)。

[第二段 母御息所の罪を思う]

御息所の(母君の御息所が)、*御身の苦しうなりたまふらむありさま(成仏出来ずに苦しんでいらっしゃる怨念騒ぎに)、いかなる*煙の中に惑ひたまふらむ(どれほど凄まじい地獄の業火の中をさ迷っていらっしゃるのだろうか)、亡き影にても(死霊として)、*人に疎まれたてまつりたまふ御名のりなどの出で来けること(紫の上や女三の宮に取り付いて疎まれ申し上げられなさる御悪名などが立っている事を)、かの院にはいみじう隠したまひけるを(六条院源氏殿に於かれては厳に口止めなさっているが)、おのづから人の口さがなくて(どうしても女房たちの口の軽さで)、伝へ聞こし召しける後(伝え聞きあそばした後は)、いと悲しういみじくて(非常に悲しくも忌まわしくて)、なべての世の厭はしく思しなりて(世の中全てが厭に思いなされて)、仮にても(たとえ憑依した仮の姿であっても)、かののたまひけむありさまの詳しう聞かまほしきを(御息所の怨霊が口になさった言葉と様子を詳しく知りたかったが)、まほにはえうち出で聞こえたまはで(中宮はとても面と向かって殿に切り出しなされる筈もなく)、 *「御身の苦しうなりたまふらむありさま」は注に<推量の助動詞「らむ」視界外推量。地獄に堕ちて苦しんでいる母六条御息所を推量しているニュアンス。>とある。出家に救いを求めているという中宮の考え方からして、御息所の死霊騒動は物の怪に対する仏教的解釈として<成仏出来ずに魔界で苦しんでいる>ということになるのだろう。 *「けぶりのなか」は渋谷訳文に<業火の中>とあるが、仏教的解釈法による文意に従いたい。 *「人に疎まれたてまつりたまふ」は注に<死霊となって、紫の上を仮死状態に陥れたり(「若菜下」巻)、女三の宮を出家させたりした(「柏木」巻)という話をさす。>とある。従って明示補語する。

ただ、

「亡き人の御ありさまの(亡き母の冥土でのご様子が)、罪軽からぬさまに(罪軽くないように)、ほの聞くことのはべりしを(噂に耳にしますのを)、さるしるしあらはならでも(それがはっきりした形に現れたものでなくても)、推し量り*伝へつべきことにはべりけれど(事の重大さを思い知るべき話ではございますが)、 *「伝ふ」は<伝える=伝え聞かせる>でもあり<伝え聞く>という意味にもなる語らしい。此处では後者で、「推し量り伝へつべき」は、その話の意味を<思い遣って知るべき>という意味かと思う。

後れしほどのあはればかりを忘れぬことにて(先立たれた時の悲しみばかりが忘れられずに)、もののあなた思うたまへやらざりけるがものはかなさを(母の方の苦しみを思い遣れなかったことの情けなさを)、*いかでよう言ひ聞かせむ人の勧めをも聞きはべりて(ぜひ償える説法を教え

てくれる僧の導きを受けまして)、みづからだに(せめて私だけでも)、かの炎をも冷ましはべりにしがなと(母の業火を冷ましたいものと)、やうやう積もるになむ(次第に年を取るほどに)、思ひ知らるることもありける(考えていたところとなりました)」「*「いかで」は「～聞きはべりて～冷ましはべりにしがな」という願望を強調する副詞で<是非とも>くらいの言い方。「言い聞かす」は<説教する、理屈を教える>で「ものはかなさを」を受けるので、出家願望の文脈で読めば「よう言ひ聞かせむ人」は<不徳を償う功德の説法が出来る僧侶>という意味なのだろう。「勧め」は<「勧進」=人々に仏の道を説いて勧め、善導すること。(大辞泉)>のことかと思う。

など(などと中宮は)、かすめつつぞのたまふ(御息所の怨霊騒ぎを仄めかしながら仰います)。

「げに(確かに)、さも思しぬべきこと(そうお考えになるのも尤もなことだ)」と(と殿は中宮の出家願望を)、あはれに見たてまつりたまうて(御息所の平穩を願ってのことだったかと、感心申し上げなさって)、

「その炎なむ(その地獄の業火というものは)、誰も逃るまじきことと知りながら(不徳の業を持つ者は、誰も逃れられないものだ)と知りながら)、*朝の露のかかれるほどは(情に任せて生きている内は)、思ひ捨てはべらぬになむ(業への執着を捨てきれないものです)。*「朝露」が<朝、降りている露。消えやすいので、古くは、はかないもの、命などにたとえた。《季秋》>(大辞泉)という語で、「朝の露のかかれるほど」は<命のある内>という言い方らしい。

*目蓮が仏に近き聖の身にて(目連という人は釈迦の護衛聖という立場なので)、*たちまちに救ひけむ例にも(餓鬼道の母を救うという難問も釈迦の教えに倣って、たちまちに解決できたという逸話があるといっても)、え継がせたまはざらむものから(とても貴女がその目連の後を継いで、たちまちに同様の御母上の救済がお出来になるものでもないのに)、*玉の簪捨てさせたまはむも(高貴なその地位をお捨てなさろうと言うのも)、この世には恨み残るやうなるわざなり(現世での仕残しに悔いが残ることにもなりましょう)。「目蓮が仏に近き聖の身にて」の格助詞「が」は「目連」という主体格の属性補説を導く係助詞語用で、論拠の接続助詞「にて」と呼応して下文への理由説明として語られる文型なので、この「△が▲にて」は<△というものは▲なので>という言い方。で、この「もくれんがひじりのみにてすくいけむためし」については、注に<「仏説盂蘭盆経」に見える目蓮が餓鬼道に墮ちた母親を救ったという話。>とある。「盂蘭盆経(うらぼんきょう)」は<大乘經典。1巻。西晋(せいしん)の竺法護(じくほうご)訳とされる。餓鬼道に落ちた母を救う手段を仏にたずねた目連(もくれん)が、夏安居(げあんご)の最後の日の7月15日に僧を供養するよう教えられた故事を説いたもの。盂蘭盆会はこの経説に基づく。梵語の原典はなく、中国の偽経(ぎきょう)ともいわれる。>と大辞泉にある。ということで、話の真偽は怪しいものの、「お盆(盂蘭盆会)」が日本の風習に良く馴染んでいて、その主要な説話として<目連の逸話>が語られている、ということではあるようだ。だから、「目連が餓鬼道に墮ちた母親を救った」かどうかは検証も出来ないし、そうであってもなくても直接の関係者ではないので感慨も無いのだが、此処の文でこの逸話が引かれていることの意味合いみたいなものは考えて置きたい。で、話はインド仏教ではなく中国仏教でのこと、と前提にして見ると、釈迦と仕える舎利佛子(しゃりほっし、サリーブツダ)と目建連子(もくけんれんじ、モッガーラーナ)の二大弟子の配役は、三国志演義の蜀国は劉備と従う関羽と張飛の構成に似る。劉備にはとても釈迦ほどの尊厳は備わっていなかったようで、諸葛孔明の補佐を得てやっと体を成した、とか言うのは悪乗りが過ぎるかも知れないが、この構成はそういう権威中枢の親しみやすさを広く印象付ける効果が期待出来る設定、ではあったのだろう。その権威中枢が、収穫祭という実利とは別の、身内事のまたは教

義上の合理性に基づいて祝賀会を開いた、とすると、その喜ばしさは価値観の共有という大きな安心感を国の隅々にまで浸透させる有難さを持つ、ことになったのではないか。この、人の価値を讃えるという仏教観の、自然を讃えるという日本古来の価値観とは違う新しさが、律令体制の確立と相俟ってこの国の建設に大きく寄与した、という経緯があった可能性は高い。即ち、祝賀行事の政治性そのものだ。その、ほぼ最初の成功例が〈お盆〉らしい。で、その祝賀行事の成功が遡って、目連の救済法要に説得力を与えて、中宮の「いかでよう言ひ聞かせむ人の勧めをも聞きはべりて」という言い方に〈出家願望の意〉を表わし、この殿の「たちまちに救ひけむ例」とも引かることとなる、のだろう。などとウダウダとノートしたりせずに、おとなしく目連の孝行を鵜呑みにすれば良いだけのような気もするが、現代の庶民が思う〈お盆〉を当時の雲上人が同様に思っていた、とはさすがに読めない。＊「たちまちに」はくたちどころに。即座に。〉とあり、「たち」は「立ち」とも説明されるが、この「立ち」は非連続性ないし対比較での意を示す接頭強調語で、「まち」は規格概念の限定性を示すから、「たちまちに」は単に〈直ぐ、早く〉という副詞ではなく、それまでの低迷に反して〈瞬時に事が解決した〉という語感。是は目連の逸話に符合する。ウィキにある盂蘭盆経の概略は〈安居の最中、神通第一の目連尊者が亡くなった母親の姿を探すと、餓鬼道に堕ちているのを見つけた。喉を枯らし飢えていたので、水や食べ物を差し出したが、ことごとく口に入る直前に炎となって、母親の口には入らなかった。哀れに思って、釈尊に実情を話して方法を問うと、「安居(あんご、集団修行)の最後の日にすべての比丘(びく、此处では「安居」参加僧)に食べ物を施せば、母親にもその施しの一端が口に入るだろう」と答えた。その通りに実行して、比丘のすべてに布施を行い、比丘たちは飲んだり食べたり踊ったり大喜びをした。すると、その喜びが餓鬼道に堕ちている者たちにも伝わり、母親の口にも入った。〉とあるので、難問も釈迦の教えでくたちどころに〉解決した、というワケだ。＊「たまのかんざし」はく『集成』は「玉で飾った中国風の髪飾り。中宮に対してふさわしい言葉遣い。」と注す。〉と注にある。

やうやうさる御心ざしを*しめたまひて(一気に出家などという極端な方法に拠らず、日々の暮らしの中で少しずつそうした菩提心を深めなさせて)、かの御煙晴るべきことをせさせたまへ(御母上の苦しみが晴れるよう修行を重ねなされませ)。＊「しむ」は「染む(深める)」「占む(大きくする)」「締む(決心を固める)」の何れでも意味は通りそうだが、「やうやう」に馴染みが良いのは「染む」だろうか。

しか思ひたまふることはべりながら(私にも同様に存じまする気持がありながら)、もの騒がしきやうに(雑事に追われて)、静かなる本意もなきやうなるありさまに明け暮らしはべりつつ(修行に打ち込む出家入信も適わないような態で日々を過ごしつつ)、みづからの勤めに添へて(自分の功德を積む読経に加えて)、今静かにと思ひたまふるも(その内に落ち着いて御息所の安寧をお祈り申し上げようなどと悠長に考えておりますのも)、*げにこそ(私の方こそ)、心幼きことなれ(御息所への思い遣りに欠けた思慮浅いことでした) ＊「げにこそ」は殿が御息所を〈心の妻〉と慕い、また自らを〈心の夫〉と自負しての言い方、と取ってみた。尤も是は、本心と言うよりは、御息所の娘である中宮の手前、母娘を尊重して見せる心理が働いた言い方、なのだろう。そういう虚栄発言の所為か、此处での殿の言い回しは全体にとても分かり難い。

など、世の中なべてはかなく(などと世の中が全て無常で)、厭ひ捨てまほしきことを聞こえ交はしたまへど(無念さを償うべき出家願望を申し合いました)、なほ(まだ)、*やつしにくき御身のありさまどもなり(剃髪姿に身をやつすには難しいお立場のお二人なのでした)。＊「やつす」は大辞林に〈目立たないように形を変える。みすぼらしく装う。〉とあり、特に此处での語用に沿う説明に〈出家する。剃髪する。〉ともある。

[第三段 秋好中宮の仏道生活]

昨夜は(よべは、昨晚は冷泉院の急なお誘いに)うち忍びてかやすかりし御歩き(内輪ごとでの簡素な間に合わせの御外出だったが)、今朝は表はれたまひて(今朝の殿は正装で威儀を正しなさって)、上達部ども(高官たちの)、参りたまへる限りは皆御送り仕うまつりたまふ(源氏殿に付き従って院参した者全員が殿の御帰宅に六条院まで見送り同行仕ります)。

春宮の女御の御ありさま(娘の桐壺女御のご繁栄振りは)、並びなく(他の女御を圧倒し)、いつきたてたまへるかひがひしさも(殿が大事に御世話申しなされた甲斐があることも)、大将のまたいと人に異なる御さまをも(子息の大将もまた人に抜き出た御出世ぶりなもの)、いづれとなくめやすしと思すに(殿は懸念もなく安心にお思いだが)、なほ(さらに)、この冷泉院を思ひきこえたまふ御心ざしは(この冷泉院をご心配申し上げなさるお心持ちは)、すぐれて深くあはれにぞおぼえたまふ(特に深く感慨を覚えなさいます)。

院も常にいぶかしう思ひきこえたまひしに(冷泉院も源氏殿を常に気掛かりに思い申しなされていたが)、*御対面のまれに(御在位中の御面会が少なく)いぶせうのみ思されけるに(もどかしさが募って思われなさって)、急がされたまひて(退位をお急ぎあそばされて)、かく心安きさまにと思しなりけるになむ(こうして気楽に御面会なされる立場にとお思いになったのかもかもしれません)。*「おんたいめん」は<冷泉院の在位中をさす。>と注にある。

中宮ぞ(しかし中宮は)、なかなかまかでたまふこともいと難うなりて(宮仕えでの定期休暇が無くなって、却って里帰りなさることもともし難くなって)、*ただ人の仲のやうに並びおはしますに(冷泉院と普通の夫婦のようにいつもいっしょにいらっしやって)、今めかしう(今更ながら)、なかなか昔よりもはなやかに(むしろ昔よりも型にとらわれず多様な)、御遊びをもしたまふ(演奏会もなさいます)。*「ただびとのなか」は注に<『集成』は「帝は在位中は後宮の後妃にあまねく心を配らねばならないが、譲位後は、お気に召した方と思いのままに暮すことができる」と注す。>とある。他の女御についてはほとんど記事が無いが、藤原姫の弘徽殿女御だけは少し気になる。

何ごとも*御心やれるありさまながら(中宮は何不自由無いお暮らし振りながら)、ただかの御息所の御事を思しやりつつ(ただかの御息所の冥土でのお苦しみを思い遣りなさっては)、行なひの御心進みにたるを(読経への依存心が深まっていたが)、*人の許しきこえたまふまじきことなれば(出家はこのように殿がお許し申しなされないことなので)、功德のことを立てて思しいとなみ(剃髪入信はなさらないまま、御息所の御霊安寧を旨とした法要を営んでは)、いとど心深う(ますます信心深く)、世の中を*思し取れるさまになりまさりたまふ(仏教の説く世の無常観をお悟りになった読経生活をなさっていらっしやいます)。*「みこころやれる」とはどういう言い方か。「御」は中宮への敬意として、「心遣る」は<気晴らしをする>という意味らしいが、「何ごとも」とあるから<思いを遂げる→思い通りに出来る>くらいの意味で、「遣る」はそれ自体で可能を示す語に見える。現代語で「やれる」というのは<出来る>という意味だから、此処の「遣れる」と紛らわしいが、此処での「やれる」は「遣る」の已然(客観想定)形「遣れ」に完了状態の持続を示す助動詞「り」が付いた「遣れり」という語の、「ありさま」を修辞する語用での連体形「遣れる」で<出来る状態になっている>ということだ。ということは、「心やれるありさま」は<思い通りに出来る状態になっている暮らしぶり>だから、結果として現代語の<何でもやれる生活>という言い方に非常に近いが、それ

は偶々であって、可能意の<できる>は古語では「遣れる」にあるのではなく「遣る」に内包されていることに留意すべきなのだろう。が、しかし是は本当に偶々なのだろうか。もしかすると、古語の「遣れる」の近似意から来る誤用が現代語での「れる」を可能意の助動詞と解釈させているのかも知れない。ラ抜き言葉との関連もありそうな気がするが、何れラ行音は厄介そうだ。*「ひと」については、注に<『集成』『新大系』は「源氏」、『完訳』は「冷泉院」とする。両説ある。>とある。形式上は冷泉院の許しがなければ中宮は何も出来ない。また当然に、中宮は冷泉院が源氏殿の実子たる事は知らない。が、実態として、冷泉院が源氏殿の意向に反することはしてこなかったし、今後もしないだろうという経験則はあっただろうし、本章一段にも「何事もまづ頼もしき蔭には聞こえさせならひて、いぶせくはべる」と中宮が殿を第一の相談相手と考えていた事が明示されているので、実質としては、やはり源氏殿なのだろう。*「思ひ取る」は<理解する。悟る。>と古語辞典にある。注には此処の文意を<『集成』は「人の世の無常をお悟りになったご日常になってゆかれる」。『完訳』は「世の中の無常をお悟りになるお気持ちいよいよ深くおなりになる」と訳す。>としてある。「さま」という言い方には生活態度や地味な装束などが示されているような気はするが、当時の宮廷読者なら具体像が思い描けるだろうが、私には明示されたところで生活実感など覚束無い。とても具体的な補語は施せない。

(2012年8月27日、読了)